

今週の為替相場見通し(2025年11月25日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ	
		注	レンジ	終値		
米ドル	(円)		154.43 ~ 157.90	156.40	156.00 ~ 157.50	
ユーロ (1ユーロ=)	(ドル) (円)		1.1492 ~ 1.1625 179.26 ~ 182.00	1.1512 180.13	1.1430 ~ 1.1630 180.00 ~ 182.50	
英ポンド (1英ポンド=)	(ドル) (円)	*	1.3039 ~ 1.3191 203.14 ~ 206.86	1.3099 204.86	1.2800 ~ 1.3200 198.00 ~ 208.00	
豪ドル (1豪ドル=)	(ドル) (円)	*	0.6422 ~ 0.6537 100.15 ~ 102.49	0.6457 100.97	0.6400 ~ 0.6500 100.20 ~ 102.00	

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

国際為替部 為替営業第一チーム 山本 裕太郎

(1)今週の予想レンジ: 156.00 ~ 157.50 円

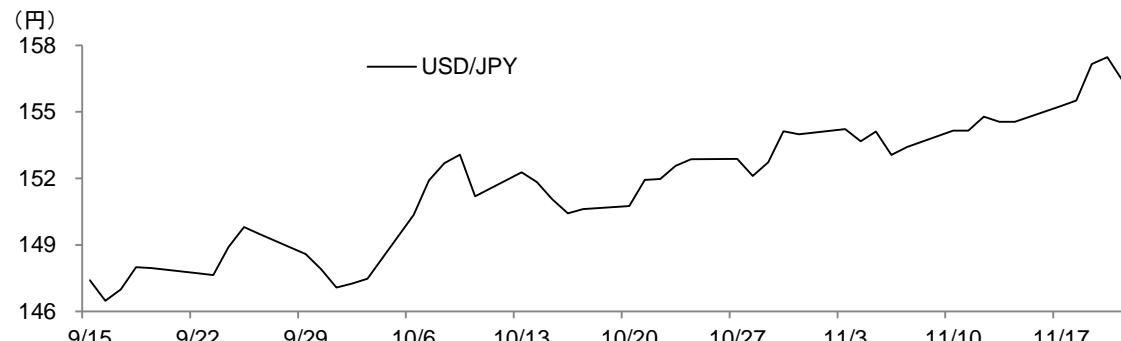
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は、週前半から半ばにかけて3円以上上昇、上値を追うも週後半に為替介入への警戒感から反落する展開。週初17日のドル/円は154.59円でオープン。東京時間、本邦7~9月期GDP(速報)が市場予想よりも堅調だった事を受けて円買いが進み一時週安値となる154.43円をつけたが、NY時間には米11月NY連銀製造業景気指数が強含み155円台前半で推移した。18日のドル/円は東京時間、日本株が軟化も高市政権の財政拡張が強く意識されじり高に推移。高市首相と植田日銀総裁の会談ではタカ派期待も新規材料に乏しい内容となりドル/円は155円台半ばまで反発した。19日のドル/円はNY時間、FOMC議事要旨(10月分)が公表されるとタカ派的な内容となり12月米利下げ期待への剥落からドル/円は157円台前半まで続伸。20日のドル/円は東京時間、米半導体大手企業の良好な決算から米株高も支えとなり157円台前半で推移。NY時間には米9月雇用統計が発表されると強弱入り混じる内容も一時週高値の157.90円をつけたがその後は米金利の下落に伴い上値を抑えられた。21日のドル/円は東京時間、片山財務相の為替介入は「選択肢として考えられる。」との発言から下落。海外時間に入っても為替介入が意識され軟調に推移、156.40円でクローズした。週明け24日のドル/円は東京市場不在。NY時間、ウォーラーFRB理事のハト派発言を受け米金利の低下に伴い156円台後半で推移した。

今週のドル/円は軟調な展開を予想。まず円において、先週は財政規律への警戒感から所謂「悪い金利の上昇」が起こり円売りとなったが、今週は長期金利の上昇が一服、円売りには歯止めが掛かるだろう。急激なタームプレミアムの上昇は債券市場の需給悪化が懸念された事が原因と考えられるが、高市首相は先週財政の持続の可能性を述べており、国債発行額も昨年度よりも抑えられるとの報道も見られる事から、日本の財政を懸念した円売りは想定し辛い。次にドルにおいては、FRB内でハト派タカ派が共存する中、25日(火)に発表される米9月生産者物価指数、26日(水)に公表される地区連銀経済報告(ベージュブック)の内容次第となりそう。先週発表された米9月雇用統計以降、労働市場への懸念が高まりOIS金利先物市場では12月の米利下げが足許8割ほど織り込まれている。米9月生産者物価指数が市場予想を下回る場合やベージュブックの内容に注目。労働市場の軟化と合わせ12月利下げを更に織り込む形となろう。その場合には日米金利差が意識されドル/円の上値は重くなりそうだ。

(3)先週までの相場の推移

先週(11/17~11/21)の値動き: 安値 154.43 円 高値 157.90 円 終値 156.40 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

国際為替部 為替営業第一チーム 武藤 智哉

(1)今週の予想レンジ: 1.1430 ~ 1.1630 180.00 ~ 182.50 円

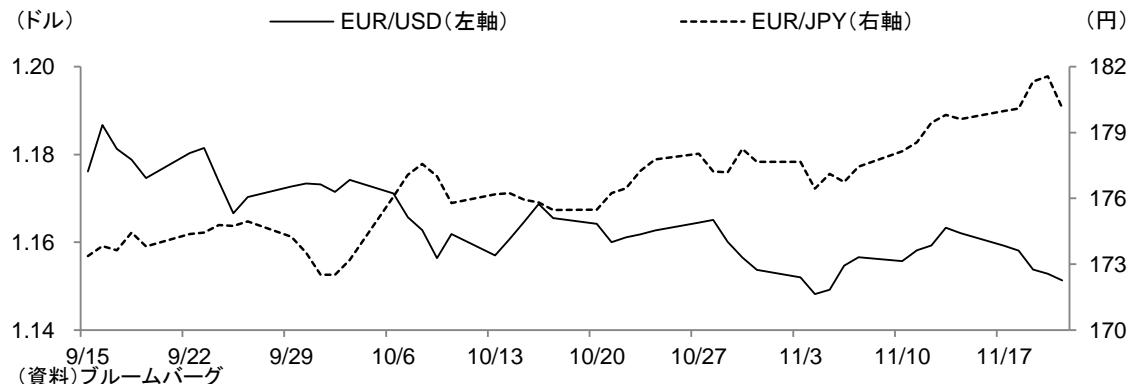
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは下落した。週初17日、1.1615で始まったユーロ/ドルはオープンと同時にドル買い優勢となるなか、じり安に推移。NY時間には堅調な米経済指標の結果を受けて1.1580台まで下落した。18日、ドル買い需要が続く中、グローバルな株式市場の調整を背景としたリスクオフの流れも加わり、ユーロ/ドルは上値重く推移。19日、ユーロ/ドルは1.1580を挟んで方向感なく推移。NY時間に入ると、米10月雇用統計の発表が中止されるとの報道を受け、米利下げ観測が後退するとともに、ユーロ/ドルは一段と水準を切り下げ、一時1.1510台後半まで急落した。20日、1.15台前半で揉み合いが続く中、米9月雇用統計の結果を受けて、米金利低下とともにユーロ/ドルは1.1550まで小幅に上昇するも、引けにかけては急速した。21日、序盤はドル安の流れに支えられ上昇するも、この日発表された独、仏、ユーロ圏の11月製造業PMIが軒並み弱い結果となると、ユーロ売り優勢の流れとなり、一時週安値である1.1492まで下落した。その後はやや値を戻すと1.1512で越週となつた。週明け24日、1.1508で始まったユーロ/ドルは先週末のFed高官の発言を受け、12月米利下げ期待が高まるなか、堅調に推移。ただ1.1550付近では上値の重さが確認されると、終盤にかけて小幅に下落し、1.1520でクローズしている。

今週のユーロ/ドルは方向感に欠ける展開を予想する。先週17日に欧州委員会が発表した秋季経済見通しでは、2025年度分のGDPの見通しを春季時点から上方修正。インフレ率についてはこれまで同様、今後2年間はECBの目標に近い2%に近い水準で推移する見通しを示した。また、21日(金)に発表されたユーロ圏7~9月期妥結賃金では、前年比▲1.9%と大幅に減速が示され、ECBのインフレ鈍化見通しを裏付ける格好となったことから、ECB当局者による追加緩和に向けた慎重姿勢は今後も継続することが予想される。こうした中、今週は27日(木)に10月分のECB政策理事会議事要旨が公表される他、ラガルドECB総裁含む複数のECB理事からの発言機会も予定されており、これまで通りのスタンスが確認されれば、ユーロ/ドルの下値を支えるだろう。もっとも直近ではユーロ圏製造PMI、独Ifo景況感と、経済指標の弱含みが続いていることや、テクニカル面では下落基調に入るサインとして見られるデッドクロスが続くなど、上値の重さもうかがえる。また先週末以降、米利下げ期待が再燃し、ドル売り圧力がかかっているものの、複数のFED高官は依然として慎重姿勢を崩しておらず、今週発表を控える米重要経済指標の結果次第では、再びドル買いの流れとなり、ユーロ/ドルの下押し圧力となるため警戒したい。

(3)先週までの相場の推移

先週(11/17~11/21)の値動き: (対ドル) 安値 1.1492 高値 1.1625 終値 1.1512
 (対円) 安値 179.26 高値 182.00 終値 180.13



3. 英ポンド

欧州資金部 天沼 幹

(1)今週の予想レンジ: 1.2800 ~ 1.3200 198.00 ~ 208.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

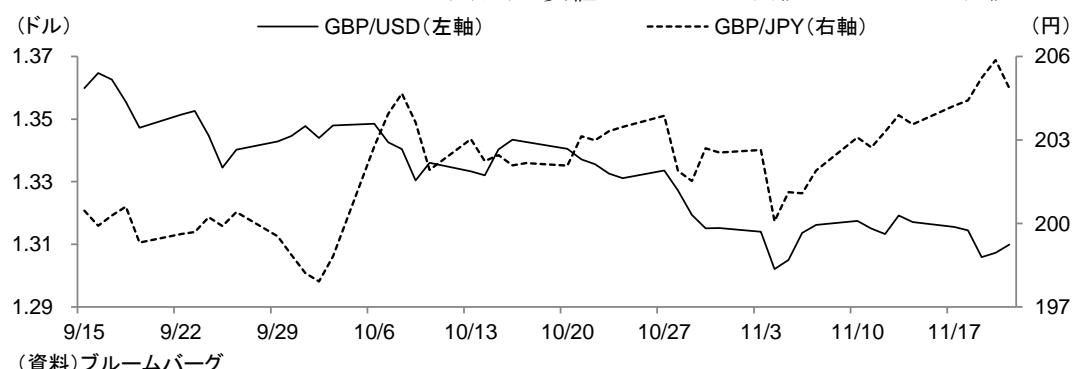
先週一週間の英ポンド相場は、対ドルで下落した。週初17日はリーブス英財務相から所得税引き上げについて否定する発言がでるも市場への影響は限定的。19日、英10月CPIが市場予想を上回るもヘッドラインにおいてBOE予想を下回った。市場は大きく反応しなかつたが、対ユーロでは明確に売られた。スワップ市場では12月利下げ織り込みが後退する形となった。午後、米労働統計局が10月分の雇用統計を発表しないとのヘッドラインが伝わると、次回FOMCで政策金利の据え置き観測が高まり、ドル買いが優勢となった。20日、米9月雇用統計が発表され、失業率が上昇したことでドル売りとなり英ポンドは反発。21日、英10月小売売上高と英11月PMI速報値が続けて市場様相を下回り、英ポンドは弱含んだ。

今週の英ポンド相場は、弱含む展開を想定。26日(水)に予算発表が予定されており、リスク回避の動きが出続ける可能性がある。今会計年度の財政赤字は今年3月にOBR予想責任局が立てていた予想を約99億ポンド上回るほど膨張しており、10月単月では歴史上3番目に大きな借り入れを記録したようだ。一方で、労働者に対する増税を行わないという公約を破るような報道が月前半に見られた後、リーブス英務相それを否定している。不明瞭な内容になれば英債券利回り上昇と英ポンド、英株式売りという全面安の展開も考えられる。とはいってもオプション市場を見れば向こう一週間のボラティリティは高く既にヘッジされており、内容によってはイベント通貨後にアンワインドされ下落回復に向かう展開もありえよう。

(3)先週までの相場の推移

先週(11/17~11/21)の値動き: (対ドル) 安値 1.3039 高値 1.3191 終値 1.3099

(対円) 安値 203.14 高値 206.86 終値 204.86



4. 豪ドル

国際為替部 為替営業第二チーム 松木 悠馬

(1)今週の予想レンジ: 0.6400 ~ 0.6500 100.20 ~ 102.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

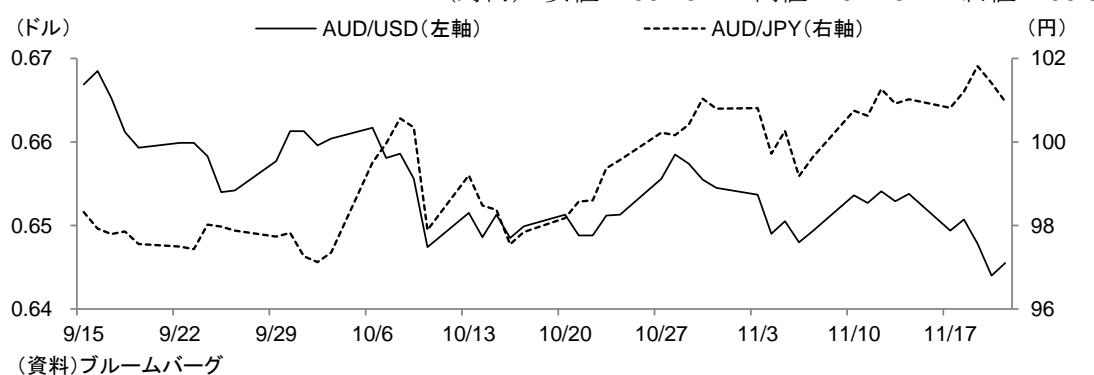
先週の豪ドルは全般的に軟調な株式地合いもあって下落する展開となった。17日は0.65台前半でオープン。米11月NY連銀製造業景気指数が市場予想を上振れたことや週央に予定されている米大手ハイテク銘柄決算への警戒感から米国株式が下落する展開が嫌気され豪ドルは0.65台割れまで下落した。18日は引き続きグローバルな株安地合いが上値を抑えつつも、0.65ちょうどを挟み方向感ない推移が続いた。19日に公表された豪7~9月期賃金指数は市場予想通りだったこと受け反応は限定的だった。NY時間に入り米労働統計局より10月分の雇用統計を発表しないとのヘッドラインに加えて、タカ派的なFOMC議事要旨(10月会合)を背景に米金利上昇、ドル高を背景に0.64台半ばまで下落。ただし懸念されていた米大手ハイテク銘柄決算では市場予想を上回る堅調な売上高を維持したことがサポート要因となり下げ止まった。20日は発表された米9月雇用統計の結果を受け乱高下も、その後は米国株式やビットコイン等のリスク資産が下落する動きに豪ドルは0.64台前半まで下落した。21日、引き続き冴えないセンチメントを受けて週安値となる0.6422まで下落したものの、その後は0.64台半ばまで反発して越週した。週明け24日は特段材料がなかったものの米国株式の上昇にサポートされ豪ドルは0.64台後半まで上昇する場面もあった。

今週の豪ドルは強弱材料に振り回され、結果方向感が出にくい推移を予想する。26日(水)に豪10月CPIが公表される予定。豪7~9月CPIではRBAが定めるインフレ目標を上回っておりRBAはインフレ警戒度高めている状況。加えて、今月公表された豪10月雇用統計において豪域内の労働需給が逼迫していることが示されている。豪10月CPIを巡っては市場予想が3.6%と前回の結果よりインフレ加速が意識されている状況。仮に市場予想並びに市場予想を上回った場合には短期的に豪ドル高がサポートされよう。ただし、FOMC議事要旨や米9月雇用統計の結果を受けてFRBによる12月利下げ観測が後退していることに伴うドル買い圧力や先週公表された米大手ハイテク銘柄の決算は市場予想対比で良好な内容になったものの、市場のセンチメントは改善されていないことが上値を抑える要因。特に後者については感謝祭の祝日を前にポジションの調整的な圧力は高まりやすく、株式市場含むリスク資産の軟調な地合いが継続され、豪ドルは弱含みやすいと想定。

(3)先週までの相場の推移

先週(11/17~11/21)の値動き: (対ドル) 安値 0.6422 高値 0.6537 終値 0.6457

(対円) 安値 100.15 高値 102.49 終値 100.97



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。